

神戸市立小学校JSL教室における学習発表会の実践報告

—作り出し、伝える喜びを体感し、自己肯定感と学習意欲を高める—

ポスター番号13 こうべ子どもにこにこ会 こうべ校内JSL研究会

発表者: 辻村文子 野村春美 石井真未枝 三木知津子 川越真理 森下実磯代

2018年12月2日(日) こどもの日本語教育研究会第3回研究会(兵庫教育大学神戸ハーバーランドキャンパス)

JSL教室の活動紹介	発表会実施の経緯
<p>活動場所: 神戸市東灘区内小学校(2校)</p> <p>支援者: 日本語教師6名(こうべ子どもにこにこ会所属、神戸市教育委員会学校教育課外国人児童生徒支援ボランティア)</p> <p>対象児童: 外国につながる児童(2018年度現在2校で24名)</p> <p>形態: 取り出し授業 マンマン もしくは 1:児童2名 週1回1コマ45分、年間30回</p>	<p>実施時期: 2014年度2月に初実施以降、毎年度末に実施</p> <p>実施目的: ・JSL教室での学びを各児童の主体性・積極性につなげられるような総括の場を作る。 ・在籍学級で自力では難しい発表をする機会を得て、自己肯定感、学習意欲を高める。</p>
発表会の概要と手順	
<p>準備期間: 3学期開始より発表準備開始。 発表内容決定: 普段の学習内容、児童の希望、課題等を考慮し、児童とともに決定する。1人あたり5分前後</p> <p>発表内容: 朗読、クイズ、作文発表、本の紹介、俳句や短歌、劇、母国の紹介等 その他の準備: 児童が招待状を作成し、学校教員や保護者を招待する。 当日の進行: 児童による司会進行で順次発表を行う。発表後は参観者からコメントをもらう。 フィードバック: 翌週、録画映像を見ながら、頑張った点、来年度に向けての反省を話し合う。</p>	

発表会事例1(概要)2017年度実施

児童の背景

学年 : 1年男児(発表時)
在日期間 : 7年(発表時)
DLA結果 : 未実施(発表時)
生育環境 : 両親ともに中国出身。日本生まれ、日本育ち。家庭内言語は中国語。両親は自営業で幼児期は保育園で過ごすことが多かった。
担当時所見 : 日本生まれであるが、細かい指示や意思疎通を日本語で理解することはできず、会話が噛み合わないこともあった。相手の発話を自分の中で咀嚼して理解することができず、条件反射として会話を行う傾向があった。認知力を使う活動に慣れておらず、質問をすることも少なかった。中国語の理解も難しく、ダブルリミットの傾向もみられた。
児童の性格 : 発表時点では比較のおとなしく強い自己主張は見られない。素直で気遣いのできる反面、物事に興味を抱いて熱中することも少なく、周囲に流される傾向がある。

発表内容

テーマ: 「これ何でしょう?クイズ」
概要 : 発表児童がある物の特徴をヒントとして出しているか考え、参観者が何について説明しているのか考え、当てるクイズ。
目的 : 相手に説明をすることで、自身の表現を俯瞰し相手を意識した発話行動を身につける。周囲の事柄に関心をもち、自発的に物事を捉える力を育成する。

実施に向けた準備の様子

- 発表会について本人に説明
- 3学期の国語の学習内容の予習もかねてこのテーマに決定
- 当初は本人がルールを理解できず、支援者が何度もクイズを繰り返し練習した
- クイズの意図を理解してからは、積極的に問題にする物を探したり選んだりしていた
- 出題ヒントをメモ書きにしていく作業は、文字数が多く苦労していたため支援者がサポートした

発表会事例2(概要)2016年度実施

児童の背景(発表時)

学年 : 2年男児 在日期間 : 1年
DLA結果 : 未実施(実施レベルに到達していないため)
生育環境 : フィリピン出身。2年生4月に来日、小学校編入。
担当時所見 : 日本語はゼロで来日、編入。家庭内言語は英語。家庭内では話すが、学校では一切発話しない場面緘黙。
児童の性格 : 母国では甘やかされていた(保護者談)ため、何でも人任せで自分のこと(片付け等)を自分でしようとしないう。思い通りにならないと、泣いて癇癪を起す。
指導方針 : 無理に発話を促さない。リラックスして学習に取り組めるようにすること。ことば以外でコミュニケーション(会釈等)も身につける。自分のことは自分でさせる。
指導内容 : サバイバル日本語(学校で使うことば、ひらがな・カタカナ)→学級での教科学習のフォロー

発表内容

テーマ: 「時を表すことば、曜日」
概要 : 支援者の質問に対して、フリップを黒板に貼って答える。
目的 : 本人にできる形で発表を行う。

実施に向けた準備の様子

- 発表会について本人に説明
- JSL教室で学習し、しっかりと定着して、本人が自信を持って内容である本テーマに決定
- フリップづくり
- 何度も予行練習

発表会事例3(概要)2016年度実施

児童の背景(発表時)

背景	A	B	C	D
学年(性別)	2年生(男児)	2年生(女児)	2年生(男児)	2年生(男児)
在日期間	約7年	約7年	約1年半(在学)	半年
DLA結果	ステージ5	ステージ3~4	ステージ2~3	ステージ2~3
生育環境(母語)	フィリピン(ビサヤ語)	フィリピン(英語)	オランダ(英語)	中国(中国語)
児童の性格	おだやか。面倒見がよい。創作・表現活動が好き。表現に創意工夫がみられる。	活発。何事にも積極的。世話好き。物語文を好み、表現力が豊か。	ムードメーカー。日常会話もまだ十分にできない状態だが、人と関わることが好き。	来日もまもなく、日常会話も不十分だが、何事も真面目に取り組める。

発表内容

テーマ: 劇「じゅげむ」
概要 : 日本語のレベルが違う子ども達が一緒にできる題材として「じゅげむ」を選び、劇形式で発表。
目的 : それぞれが少しハードルの高い課題に挑戦すること。レベルの違いを越えて協力しあうこと。

実施に向けた準備の様子

作成した脚本

1/12(1コマ)	1/19~2/9(4コマ)	2/16・23(2コマ)	3/2
本の読み聞かせ	A・B 脚本づくり C・D じゅげむの名前を覚える	合わせ稽古	当日
	教師 脚本指導、小道具づくりの手伝い		

発表会の成果


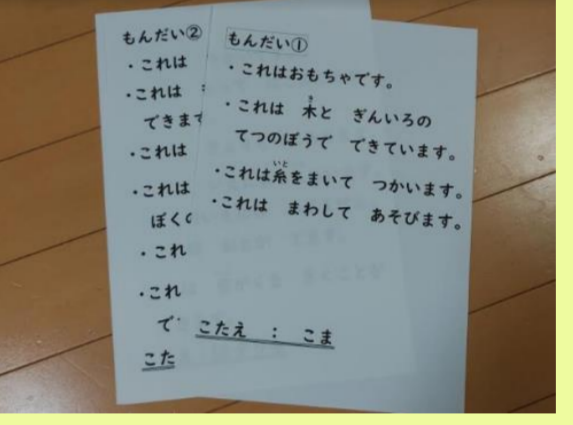
- 1、自尊感情、学習意欲の高まり**
参観者から褒められ、笑顔を見せ、喜び児童が多い。また、他の児童の発表を見て、自分の発表を省み、「来年はもっと大きい声で話す」「クイズ形式の方がみんなにわかりやすい」「原稿を見ないで発表したい」など反省点を口にし、実際にその反省点を踏まえて、翌年の準備に取り組む姿勢が見られる。
- 2、学校教員、保護者からのJSL教室への理解の深まり**
参観を通して、JSL教室での学習成果を実感してもらえ、児童の成長、課題を共有しやすくなるなど、連携につながっている。
- 3、日本人児童の多文化理解**
在籍学級、学年集会での再発表の機会を与えられるケースが増え、日本人児童の多文化理解を深める機会にもなっている。発表児童にとっては、級友からの賞賛も自尊感情の高まりにつながっている。

今後の課題

- ・児童の主体性をどのように引き出すか
すべての児童が発表に抵抗なく、積極的に取り組むわけではない。限られた準備時間内で、その児童にとって適切な難易度、かつ本人が主体的に取り組めるテーマ、内容を十分に引き出しているかを省み、いかに引き出すかを検討する必要がある。

発表会事例1(実施)2017年度実施

当日の発表

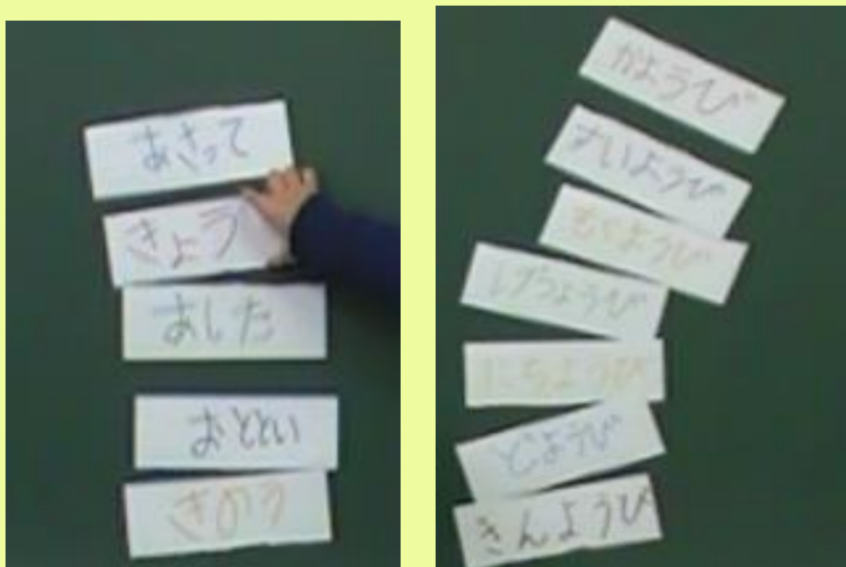
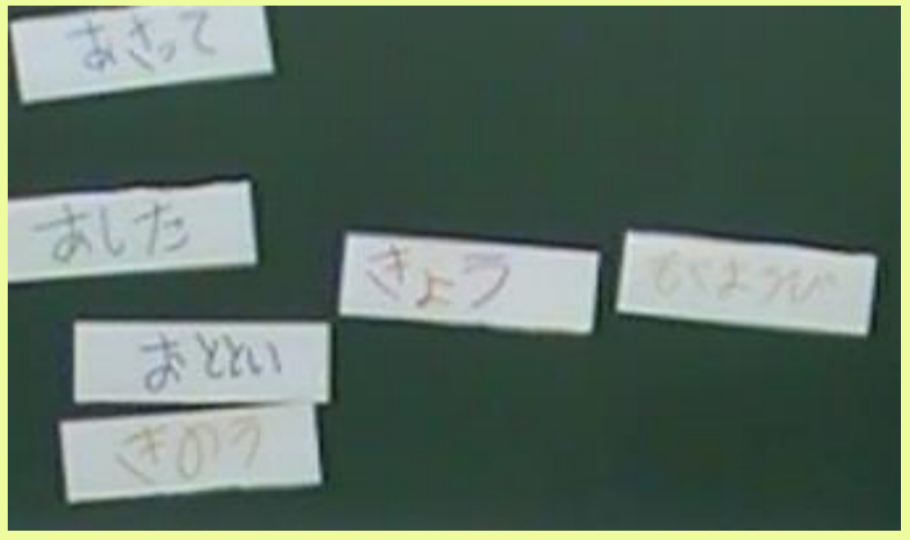
- 1) 黒板の前に立ち、メモを見ながら問題文を読む
支援者はサポートのために横につく
- 2) 参観者の様子を見ながらヒントを出していく
- 3) 参観者から挙手があったら解答者を指名して答えてもらう
- 4) 答えがあっていたら正式な解答を参加者に伝える

児童の様子、その後の変化

当日: 緊張することもなく、参観者の前で堂々と笑顔で出題することができた。参観した学校教員、保護者から楽しかったというコメントをもらい照れながらも笑顔を見せていた。
後日: クラスでも発表の機会があり、自信をもって出題をしていた。発表会以前は物事に疑問を抱くことが少なく受け身で質問もあまりしなかったが、この活動後、言葉に対する興味がでてきた。
次年度以降: 積極的になり、自己主張もするようになった。クラスの授業で疑問に思ったことを支援者に尋ねてくるようになり、その際自身の意見も主張できるようになった。

発表会事例2(実施)2016年度実施

当日の発表


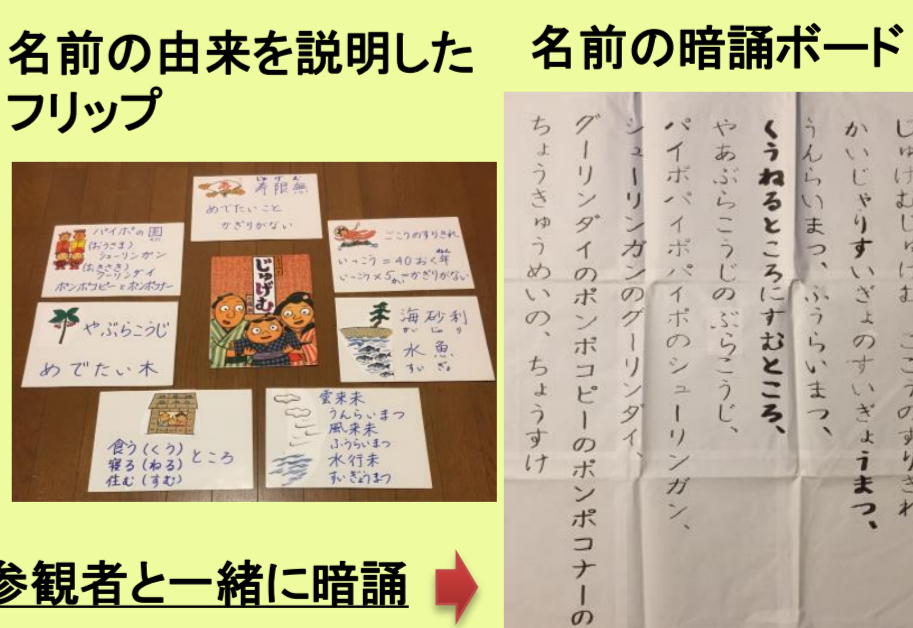
- 1) 黒板に「きのう」「きょう」「あした」および各曜日の書かれたフリップを準備する。
- 2) 支援者「今日は何曜日ですか」
児童「きょう」「もくようび」を並べる。
- 3) 同様に「きのう、あした・・・」も行う。
- 4) 「体育は何曜日ですか」等に指さして答える

児童の様子、その後の変化

当日: 参観した学級担任、放課後教室ボランティアから発表に取り組んだことを褒めるコメントをもらい、笑顔を見せる。
後日: 学年集会で同じ発表の機会を与えられ、級友から「全然話さないから、日本語が全然わからないと思っていただけ違った。ちゃんとわかっていてすごい」と言われ笑顔を見せる。
次年度以降: 発表会が開催されることを知ると、張り切って準備に取り組む。小声ではあるものの、発話が見られるようになってきた。

発表会事例3(実施)2016年度実施

当日の発表

- 脚本を元に、子ども達主体で劇を進める。
支援者は、補佐役。
役者【A・B・C・D】ナレーターフリップ説明【A・B・C】
- 始めは緊張した表情の4人だったが、段々いきいきとした表情に変化。
A・Bは役になりきり、自然な日本語で発表。
C・Dは、一生懸命覚えた台詞を堂々と発表。

児童の様子、その後の変化

- 学級担任からの申し出により、学年集会で発表することになった。
- Dが、地域のクリスマス会で「じゅげむ」の名前を発表した。

支援者の声

- ・AとBは、自分の考えがどうやったら人に伝わるかの体験ができた。
- ・Cは、長い名前を覚えたことで自信が付き、あきらめずに取り組めるようになった。
- ・JSL教室の同級生との共同作業が、来日して日の浅いDの緊張感をほぐす役割を果たした。

Aは2017年 Bは2018年 JSL教室卒業

BのJSL教室卒業時の作文から

「発表会で楽しかったのは、みんなで協力しあって、先生たちにアドバイスしてもらったところです。まわりをみると、みんなが、がんばっているすがすがしさが、とてもよかったです。」